

未来への伝承

七五三の祝着いわいぎく産着から着物へく

子どもが無事に誕生し成長することは、医療の発達していない昔はとても大変なことでした。そのため節目、節目に成長をお祝いし、これからも健やかに育つことを祈念する行事が行われました。こうした「ハレの日」は、今でも私たちの暮らしに残っています。七五三も、そのひとつです。

なぜ3歳、5歳、7歳を、節目とするのでしょうか。3歳は、衛生のため短く切っていた髪を、男女ともに伸ばし始める年頃でした(髪置)。5歳になると、男の子は初めて袴を着け(袴着)、これに境に幼児期から少年期に入ります。7歳は、帯解きあるいは付け帯といって、女の子が着物の付け紐に代わり、普通の帯を結んで大人の仲間入りをする時期でした。また、「七つまでは神のうち」といって、昔の人は子どもが7歳を迎えてやっと一安心したのでした。

今回は、そんな七五三にまつわる品をご紹介します。写真は、平成30年に市民の方から土浦市立博物館に寄贈された祝着です。地の色は水色で、赤や紫で花柄がちりばめられています。寄贈された方によると、終戦直後の昭和22(1947)年11月に、実際に着たものだそうです。

この祝着はもともと、昭和16年、旧栄村(現つくば市)でその方が生まれた時に、母方の実家から送られた一つ身の産着でした。医者から「この赤ん坊は育つまい」と言われるほど小さい子だっ

たそうで、産着には無事に育つよう強い願いが込められたことでしょう。数えて7歳の時にはそれをほどこき、四つ身の着物へ母親がていねいに縫い直してくれました。というのも当時は戦後の物資不足で、着物でもなんでも、新しく買わずにリサイクルするのが当たり前だったので。これを着て、絞の三尺帯(兵児帯)を結び、村の氏神様へお参りに行きました。その際、知人のカメラで撮影してもらった思い出も教えてくれました。祝着は大事にとっておいて、嫁ぎ先にも持っていました。



▲七五三の祝着

現在の七五三では、女の子の着物はみな赤やピンクの柄も鮮やかな、華やかな装いです。この祝着もかわいらしく華やかですが、それより少し前に日本が戦争をしていた頃は、七五三はもちろん、花嫁衣裳なども、できるだけ質素であることが推奨されていました。「ぜいたくは敵」と言われていた時代です。七五三の写真には、国民服や海軍の制服のような服装の少女たちが写る例もあります。

暗く味気ない規制の時代が終わって、華やかなものが許され、自由な時代が始まる。七五三の祝着とそれにまつわる思い出は、そんな時代の雰囲気を表すものかもしれません。

博物館では3月8日(日)まで、「昔のくらしの道具」展を開催しています。今回ご紹介した祝着のほか、今より少し前の時代の日常と、ハレの日に使われた道具を展示しています。是非足をお運びください。

岡市立博物館(☎824・2928)